

第 49 回保育環境セミナー『Q & A』

今回、セミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、【保育環境】【保育士の対応】【異年齢児保育】の3項目に分類し、ギビングツリー代表の藤森平司先生に考え方を示して頂きました。

【保育環境（乳児）】0.1.2 歳合同で過ごす環境づくりについて。

普段は環境を分けて過ごすことがほとんどですが、合同で過ごす際の玩具等の配置など、どこに合わせたら よいか迷いがあります。

私が考えていることをお話しします。それは必ずしも正解という事ではなくて、それぞれ最終的に地域性や、よく子どもの様子を見て、自分の園のものを作ってもらえたらと思うが、基本のお話をします。環境というものは、それぞれの時期、発達を保障したり、発達を促す環境が必要だと思っている。それぞれの年齢はということか。見やすいのが以前の指針の中に、発達過程が書かれ、それぞれの年齢にどんなことをするか書かれている。押す、引っ張ると書いてあったら、つまむものを用意するというようにして発達を促している。ゾーンは、子どもがやりたいものを、自分から環境に働きかけるために用意する。絵を描きたいと思ったら、どこに行けばクレヨンがあるかを知って、自分で取り出すように、自ら働きかけるものがゾーンと言っている。0.1.2 歳は園紹介でもあったが、赤ちゃんは何かをやりたいと思って取りに行かない。目についたものを取りに行く。1つは、目につくようにすることが環境。寝返りをする時期は、手に届くところに欲しいものを散らしておく。それを取ろうと寝返り、ハイハイも目線の先に面白そうなものを用意したら、必死で這っていく。ハイハイが出来るようになると、ハイハイの姿勢の視線の先の、目の高さにものを置いて物を取りに行く。つかまり立ちをするようになったら、棚の上に物が置いておくとか、欲しそうなものを棚の上に置くように、それぞれの発達にあったものを置く。どんなものを用意したらいいかと言ったら、自分の発達を促す、興味があるものを手を取る。赤ちゃんから私は、選択をすると思っている。例えば、ハイハイする赤ちゃんにTVゲームを置いて、もう片方にはボードを置いたら、ボードを取ると言うことがあって、発達が違ったものを置いても興味を示さない。本当は1人ずつにあったものを用意できたらいいが、つかまり立ちをしたらその頃には、引っ張ったり、めくったりするようなものを置いておくといいと思います。これが基本的な0歳児クラス。赤ちゃんは歩き始めるようになる。歩くという事は、自分から移動する頃になると、歩くことが好きになる。探索活動です。本来探索活動は、なめ回しからはじまって、探索活動の1つで、確かめることもそう。それが今度、場所として移動すると歩き始める。探索したがるが、危険な場所に行かせることはできない。安全対策できるような場所、私の園では、パーテーションから出られるようにしている。部屋の中に扉を作って、出れるようにする。1歳児はお人形を背負って歩くとか、買い物袋を持って歩くことをしたがる。その頃に袋を用意することが必要。1歳児は象徴遊びと言って、見立て遊びを始め、将来の想像力を増すために必要なので、あまり具体的なものを置かない方がいい。昔は、葉っぱや木を見立て遊んでいたが、最近ものが豊かになり、業者がお皿を作り、おかずを作っているが1歳児はそうではなくて、ブロックのような、自然物もいいが、四角いものを電車や車にしたり、携帯電話にしたり、色々なものに見立てることが必要なので、1歳児クラスは、具体物よりも見立てられるものを置いておくといい。しかし、取り合いをしたりするので、1か所でコーナーのように置くと、そこに溜まって取り合いを始めるので、部屋に散らばしておいていいと思っている。子どもが集中しないようにしている。体を動かさしはじめ、歩き始めたりすると、走り回ったりする子がいる。見立て遊びをする子どもの周りを走り回りようになるので、動的スペースと静的スペースに分けている。それから、絵本を自分で見るようになる。それは、先生が両脇に子どもがいて、読み聞かせをしたり、集団に対する読み聞かせよりも、膝の上で読み聞かせすると、友達にするようになる。うちの園では、囲った空間の中で、子どもたちが読み合えるような空間を作ります。子どもたちが何をしていたかを見て、空間を作る。1歳の後半になると、微細運動と言って、指先が使えるようになるので、細かい作業、パズルや紐通しをしたくなる。その頃には、0歳児クラスは歩き始めると、そのスペースに行きます。微細運動をする子たちは、移行してきた0歳

児ががちゃ、がちゅすることがあるので少し困います。1歳児は其中で、落ち着いた空間を用意します。子どもの様子を見て、やりたいことを、環境として順に作っていくことが場所であり、物である。そこには当然幅があります。発達のもの置いておけば、子どもが興味あるもので遊び始める。子どもは大人と違って、次々と関心が移っていくものです。これは赤ちゃん研究があるが、赤ちゃん研究を進歩させたのは、犬と猫の違いを子どもは気づいているだろうかという研究がある。どう調べると思うか。赤ちゃんは同じものを見ていると飽きる。ずっと犬の写真を見せると飽きる。途中、猫の写真を見せると、「えっ!？」と言って注目し始めるというのは、分かっているということになる。不思議だが、赤ちゃんは早いうちから年齢差、男女差に気付く。しかし、人種の違いには気づかない。年齢や男女は分かるそう。飽きるという効果を使うように、もともと赤ちゃんは飽きる。大人はずっとやれというが、赤ちゃんはすぐに飽きる。次の新しいものに目移りする。その時に、片づけなさいという必要はない。電車に乗ると分かるが、子どもは行く方向を見られている。そうすると、過ぎ去った景色を見られている。子どもは、新しいものを見るものですから、遊んで、目がいて、次の所へ行って取り組んでもいい行為。それを片付けさせてから行きなさいというのではなく、先生が片せばいい。次の所へ行かないで、暇そうにしている子に「一緒に片づけて?」と言えればいい。それは、先生のお手伝いをすることが好きなのです。それを罰するように、自分で片しなさいというのは酷。その代り、暇そうで、手伝ってくれる子には言って、先生の姿を見て、興味ありそうな子にお願いすればいい。片づけるのは、それぞれの発達。小さいうちはそういう環境。私の主張は、2歳だけ別にしようとしている。脳の拡大もあるが、ピアソーシャルスキルと言って、同年齢で徒党を組むことに興味を持ち始める。1歳の終わりから2歳児クラスは、同じ子同士で仲間づくりをはじめ、これが将来の社会性の基礎に繋がる。0.1と2歳は極端に違うと思っている。小3の成績にしても2歳児の影響が大きいのは、2歳の頃に他者と徒党を組む。それに対して、大人に反抗していきます。嫌々期です。人間らしい前頭葉が育つ行為です。それを2歳の頃につなぎ合わせることをするので、電車で遊んでいると、自分の線路で遊ぶ子と、先生が繋げてみたらと、大きく線路にして一緒に作ることをしていきます。昨日、質の高い保育の中に、先生は繋ぎ発展させていく。これが2歳児クラスで重要です。ごっこ遊びは、1歳位は壁に向かって、自分で料理をしたり、見立てて遊んでいるが、2歳になると、先生が役割分担をさせていきます。先生がお母さんになるなら、お父さん役やってとか、お客さんになるとか、役割を交代してグループで遊び始めるのが2歳児クラスです。うちの場合は、お集りをするときも、丸くなって、絨毯も丸くてみんなの顔が見えるようにし、ままごとも対面で顔が見えるようにします。それから、2歳児になると自分で筋肉が動かせるようになり、自分の意図したように動かせるようになり、微細運動と言って指先の細かなものが出来るようになるとか、手を動かせるようになったり、自分で着替えが出来るようになったり、フォークを使えるようになるので、基本的な生活習慣の自立が2歳児クラスで完成します。2歳はそういう事で、自分でやれるようにする年齢なので独立させています。子ども同士の関わりと、微細運動をするようになるので、障がいの子が見えてきます。関わるのが苦手とか、手先が困難とか、障がいの子が見えてきます。親にはまだそれを報告しないで、先生たちが3.4,5歳に行った時に、ケアしたりするためにしている。2歳だけにしないと、中々見切れない。私の考えは世界にはないかもしれないが、0.1は通して発達を見ていく。3.4.5歳は、個人差を保障し、2歳だけは見ていく必要があると思っています。古希祝を機に本を出版するが、それぞれの年齢の環境を、室内環境と屋内環境の章があって、それぞれの年齢にどんなものが必要かを細かく書いています。最終的には、子どもが興味があるものを探す。私の孫の経験では、1歳児の頃に好きなおもちゃは、掃除機とかゴミ箱とか、スリッパの裏とかをなめる。やたらと好きなのは財布とか、娘がおもちゃを消毒しているが見向きもせず、汚いものをなめ廻っている。妻と相談していらなくなったキーホールダーを消毒しても、普段使っているものに行く。無理に不潔にする必要もないが、自分でも興味持ったもの行くので、大人が神経質に何を与えないか考えなくてもいい。ただ、指や手首の発達を促すものは手作りしないとない。例えば、トイレトペーパーを引っ張ってしようがないので、布をつけるとか、ティッシュを引っ張って仕方ないなら、布を入れるとか、引き出しを引っ張るなら、牛乳パックで作るとか、赤ちゃんがいたずらしそうなものを作ることが大事かもしれません、牛乳パックのストローで飲むためには、ストロー入れのようなおもちゃを作るとか、日常的なものを玩具で手作りするといい。物という環境、場所の環境はそれぞれの発達を見るといい。一度、町の中を子どもの目線をビデオに撮ったことがある。子どもから見ると、歩く人のお尻しか見えないのでよくぶつかる。ただ、突然目の前に現れるものはケーキのショーケースや、ハンバーガーの看板が、視線の真正面に来るので欲しいと言ってくる。向こうはちゃんとそれをリサーチしている。子どもの目線にち

ようど現れるように、私たちも子どもの興味があるものを置くといいので、子どもの目線でいいので一度、室内を撮ってみてください。棚の奥にあると見えないので、室内を一度、部屋の中を歩き回るといいかもしれません。特に登園してからどう部屋に入るか。どんな面白いものがあるか、支度をする前にそこへ行くとおもいます。子ども目線と言っても、理屈では分からないと思うので、一度撮ってみて、園の環境を見直してみてください。

【保育環境（幼児）】

幼児クラスでママごとコーナーがなかなか活用できていません。どのように工夫したら良いでしょうか？

まず最初に、子どもが自発的にやらないといけないので、無理やりさせる必要はない。ただ、私の考え方では、2歳児までは、ママごとゾーンと言うが、3以上になると、ごっこゾーンに変わります。ごっこゾーンは、子どもたちの身の回りの大人の真似をすることがごっこだが、2歳の身近なものは、家や家庭の台所なので、ママごとを真似する。3.4.5になると、社会の仕事を真似しようとしします。私の孫を見ても、妻と孫が買い物ごっこをしていて、妻が「いくらです」と孫に言うと、孫がお金を出すかと思うと、カードを出してピッとする。私の園で、実習生が来て、「先生が入れて！」と言って、子どもが「いいよ」と言って、「先生、何食べたい？」と言って、「オムライス！」と言った。子どもたちは何をしたかという、まずPCでレシピを調べはじめた。それなので、うちの園では、ごっこのゾーンにパソコンが置いてある。子どもはすぐ調べて、作りはじめるように、社会を真似するのが子どもです。近くにコンビニが出来たら散歩で行って、お店屋さんごっこを始める。韓国に見学に行った時に、消防士の服装などがあって、見たものを真似できるようにしている。3.4.5は社会で見たものを真似したいと始める。ある時、お店屋さんごっこをして子どもたちが揉めた。子どもたちが困りを作って、経営者会議をしていると言っていたが、そういう事に合わせて環境を作ってあげる。子どもの興味・関心に合ったものに変える。子どもの興味・関心に合わせて、膨らませて実現させる。ごっこゾーンの中に、宇宙服や白衣があって、そういうものを真似する。ドレスは、よそ行きの衣装だが、私の園ではその中に、他の国のドレスも置いてあります。色々な文化の子もいるのでそうしています。衣装も刷り込みを持たないために、アメリカでは各国のドレスを置いたり、人形も様々な肌のを置いたり、ママごとの所には女の子が行くことが多いが、男の子も行けるように、ドイツや韓国ではヘルメットや工事をするような服装なども置いていたりする。お化粧品みたいなのがあるが、ほとんど使っているのが男の子。男性でも化粧品をする。憧れかもしれないが、男の子が女の子のドレスを着たり、ブロックゾーンには、男の子が多いので女の子も行けるように、キラキラしたブロックなどを外国では置いたりする。性差があると思うが、偏らない工夫もしている。3.4.5の幼児のごっこは、子どもが散歩に言った中で、興味を持つものが影響してくる。興味持ったらそのグッズを置いておく。メニューを置いておくとか、それらしいものを置いておくと、ごっこを始め、大人の社会を真似していくのがロールプレイングになって、社会を学んでいくといいと思います。子どもが無理やり惹きつけなくても、時期が来たら流行ると思うので、流行ったら膨らましてあげる。他の所へ行っていたら無理することではないので、子どもがしたいと思った時に、グッズと置く工夫をするといいと思います。

【保育環境（狭い環境）】

狭い、小さい環境でのコーナーの作り方のコツなどありましたら教えていただきたいです。

皆さんの資料の中に、5Mというものが入っている。その中にメリハリがある。環境においても、メリハリをつけることで、平坦な日常に刺激を与えたり、潤いを与えたりするために、空間にしても、壁がないと広い空間に過ごすことが多い。子どもは広いだけがいいわけではなくて、子どもが閉じ込める場所、凹み。そういう空間的に、のっぺりした中にくぼみを作ったり、潜れるような場所を作ることは精神的にいいと言われている。大きなところでいるだけでなく、2.3人が閉じ込める場所、作り方は色々あって、段ボールや発泡スチロール、押し入れなど、狭い空間は壁や天井が低かったり、いつでも広い場所だけでなく、閉じ込める場所をそれぞれ工夫すればいいと思う。部屋の隅に大きな幹を作って、穴をあけて3人位は入れるようにしてもいいし、ベランダに大型犬の犬小屋を置いて入って遊ぶとか、工夫が出来たり、段ボールを組み合わせて迷路みたいなものを作ったり、閉じこめれる場所を作ることが必要。くぼみに入って話せたりする場所を作ることが、空間づくりとしては必要です。私の園でも1歳児クラスに押し入れに狭い空間を作ったり、2歳はロフトの

下が低かったり、3.4.5 歳は茶室があったり、空間にメリハリを作る工夫で考えるといいと思います。建築用語でアルコーブやデンという。空間の広さとして工夫する。明るさも少し薄暗い所を作ったり、床も硬い所だけでなく、クッションを置いておくとか、平らな所だけでなく、傾斜の場所やネットの上を歩いたり、園内にメリハリを作ると、子どもたちは日常でもメリハリがつくと思うのでそれぞれ工夫してみてください。

【保育環境（自然環境）】

保育環境で動物・植物と触れ合えるコーナーを拝見させていただきました。

その多さを見て驚かされました。なぜ動物・植物のコーナーを充実させたのですか？

もともと、自然は大切だが、指針の中で10の姿に書かれ、意識をするようになった。子どもたちは、虫が好きと嫌いが出るように、よく命の大切さを教えるというが、生きているものを大切にする。私たちの基本理念は、「共生と貢献」。それぞれの生き物が生きていく中で、共生していくことと体験させる。科学ゾーンの1つで、観察ゾーンで不思議さを体験することです。不思議さや好奇心。今年、『人類の誕生』というNHKのドキュメンタリーがあったが、人類はどう生きてきたのか、好奇心が強かったからと言われていました。それが、子どもが強いという事で、好奇心は知識ではなくて、不思議さを知ったり、答えを知ることではない。これが先ほどドイツ報告で出たかもしれないが、ドイツでは「小さな科学者」という取り組みをしています。自然科学を体験させます。その時にドイツの考え方で感心したのが、コップに水を入れて、そこに食用油を入れると水と油の2層に分かれ、それだけでも不思議だが、油の上にインクを落とします。じっと見ていると、油の層を通して、水に入った途端カラーが広がり綺麗です。ドイツへ行った時にみんなでやってみました。何人か落ちない人がいて、ある人がゆすって落とそうとしたり、吹いたりしていた。それをドイツの科学の責任者が見て、日本では「ちゃんと、見ていなさい」と言うと思うが、その人は手を叩いて、「まさに科学者！」と言った。科学者は、何とかしようとして色々する心です。結果を求めるのではなく、何とかしようとしてこそ科学です。日本は、「ダメ、見ていなさい！」と怒ってしまいそう。というように、子どもが不思議がるとか、興味を持つとかが科学ゾーンです。東京では、自然に触れることが出来ないの、意図して置いてあり、それを観察する。日本の四季の移り代わりを知るとか、食物連鎖をするとか、ガマガエルを飼うと、子どもたちがゴオロギを取ってきて、餌にするとかわいそうは、かわいそうだが、そうやって食物連鎖をする。飼いきれなくなり公園に放しに行った。そういうようなことを体験して、不思議さや命などを自然に知っていく環境も大事。10の姿の一項目に書かれたので、私たちは、積極的に園の中で工夫していく必要があると思っています。

【保育環境（園庭や屋外）】

園庭が広いわけでもなく、無いわけでもないが、子どもたちが園庭で遊びたがらない。室内遊びが楽しいならいいが、そうでもない様子。狭いながらもどのような環境が子どもたちに魅力を感じさせてあげられるのかアドバイスをいただきたいです。

ドイツで面白いことがいくつかあった。保育は基本選択制。唯一強制してやることは、ある時間園庭に出る。園庭は日本の発想と違って、走りまわって遊ぶのではなく、外気に触れる。陽に当たる意味があるので、園庭に行けば一っとしてでもいい。それも園庭の意味。何も友達と遊ばなくても、一人でぼーっとしていてもいい。親や先生は心配するが、私が一度そういう言葉を作ったことがある。「親を殺すには刃物はいらぬ。あなたの子どもに友達はいない」と言ったことがある。私の息子が、小学校の個人面談で先生から妻が言われたのは、「お宅の子は、友達は蟻しかいない」と言われ、蟻だけでもいいじゃんと思ったが、一人で草むらでじっとしていてもいいし、園庭の中にも様々なゾーンがあります。例えば、樹の木陰で本を読む。園庭の外で、制作する場所、必ずしも走りまわるだけでなく、自然の中で室内と同じことをするのが園庭です。日本のように、ただ広いだけでなく、虫を見たり、草を見たり、木陰でぼーっしたり、外で遊ぶのもドイツの特徴がある。雨だから散歩や遠足をやめることはない。雨は中止の理由にはならない。ドイツの言葉に、「子どもにとって悪い天気はない、悪いのは天気にそぐわない服装をすることだ」ということがある。全員の園児のための長靴があり、干せるようにしてある。一昨年ドイツへ行った際、雨の日があった。0.1,2歳の園だったが、園庭で遊ん

でいた。雨が降ってきて、屋根の下に避難して、そのうち雨の中で子どもたちが遊び始めた。傘の中にいたのは先生だけ。空に向かって口を開け雨を飲んでいる子がいれば、水たまりをスコップですくい、水を飲みはじめたり、もう、びちゃびちゃ。先生だけ傘の下にいた。部屋に入ったら着替えて、ドライヤーで髪を乾かして、それが嫌な子は部屋で遊んでいました。無理やりする必要もないので、雨でも雪でも変わりありません。園庭で遊ぶ概念が違います。雨の日は、雨に触れるという感じですね。園庭では、必ずしも走り回らなくてもいいと思います。最近、言わないが昔は言ったことがあるが、お集りでも走り回る子がいる。それに対して、しゃがみこんで草むらばかり見ている子がいる。その時に私がよく思ったのが、もし震災で取り残されたときに誰かを助けて！となったら、いつも走り回っている子が呼んで来てくれると思います。食べ物が無くなったら、いつも草を見ていた子が、「これ食べれるよ！」と言ってくれると思います。子どもには、生まれつき役目があり、持っている。大人の価値観でどれがいい子かはおかしい。遊ばないで、ゴロゴロしていることだっていい。友達と遊ばないで、隅にいてもいい。その子の好きなことが、園庭でも発揮できるものを置いておく。制作が好きだったら、外で葉っぱで制作できるようにする。本が好きだったら、木陰を作って外で絵本ゾーンを作ったり、それぞれの子が、外でも発揮できることが必要かもしれません。そして、特に広さが必要なわけではありません。日本の園庭の広さが必要だった理由は2つ。例えば、園庭の広さは、私の娘の孫は幼稚園に行っていたからその理由がわかります。卒園するまでお散歩に行ったことがない。幼稚園は一人担任なので、一人で30人見ていたら、一人でお散歩に連れて行けない。園庭でしか遊ばないので、広くないといけない。私の園は、ほとんど散歩。園庭が狭くても関係ないことが一つ。もう一つは、昔の園庭は運動会をするため。年に1回しかしないのに、何でそんなに広い必要があるのか。昔は、軍事業連のためなので、筋肉トレーニングが中心だった。しかし、幼児は、筋肉は育ちません。小さいころには、体幹や敏捷性、柔軟性です。そんなに広さは必要ない。狭ければ、よけることが出来る。草むらや木陰で座ることが大事。近くの公園で走ればいいと思う。私の園では目の前に小学校があるので、1週間に2時間借りて走り回っています。色々な所を使うことが大事なので、広いだけがいいわけではないと思います。

【保育士の対応（職員の上下関係）】

保育資格者が少なく無資格のサポートが多い職場です。見守る保育を どのように全体に周知できるでしょうか。長く勤めている方も多いだけに若い資格者はあまり強くできません。

私は人と会う時に欠点がある。人の名前を覚えられません。全ての人と初対面。余談だが、私の娘の孫がいるが、私の妻が、その孫の園に2人転園してきたらしく、うちの孫に妻が「2人転園してきたんだって」と言ったら、「俺は、人の名前は覚えられない」と言っていた。年齢を覚えることが出来ない。人の年齢で覚えようとしていない。若くても保守的な人もいる。最終的には個人差だと思うが、その中でいつごろ学んだか。いつの時代に学んだか。例えば、50年あたりにスポックの育児書が出回った。その時に学んだ人は、夏に陽にあたるほど風邪を引かないと言っているが、今は、あまり陽に当たらないほうがいいと、その頃に教わった。その人が学んだ時代と違っていることがあるので、年齢によって学んだことが違うと厄介。時代によって刷り込まれる。3歳では遅すぎるという早期教育が言われていたので、英語で苦労した年齢なので、年齢的に難しい。昔からと言ったときに、それがいつからか。人間は進化があり、後になると笑い話になる。同じように皆さんの年齢で厄介で、将来笑い話になるのが、男性の出産立ち合いは人類で今だけだそう。人類はこれまでしてこなかった。立ち会わないと父性が育たないように言われるが、そんなことはない。その時代、時代なので経験上であるかもしれない。現在の研究や、子ども観を大切にしないといけない。私はよく言うが、農家の方に話す時に、かつてはキュウリを作るときの課題は、安く、多く、時期の違う時に形がいいものをつくるのが命題だった。形がいい、真っすぐなものを作るために、農薬を使う。今は農薬が体に影響を及ぼすので無農薬や、高島屋で新しく出来た新館には、国産小麦などが多い。それを時代ではそうでなかった。今はよくないというように、昔の保育が若者たちに出ている。それを見直して、キュウリは曲がったって、農薬を使わなくても曲がらなくていいと。お互いに学ばないといけない。否定するのではなく、年配の先生も、これまでの経験からしようとしている。ただし、違う研究がされている。否定するのではなく、新しい勉強をしましょうとして、新しい考え方を勉強しましょうということ。年配を大事にしたいと思っているのは、長い間子どもを見てきているから。子どもが変わってきていることに気づける。子どもが、最近変わってきているな、昔と違っているなということに気づくのが年配だと思っている。早い話、年配から率先して保育を変えないといけ

ない。皆さんがもし、勉強したいと園から言われてきているか分からないが、次の園長をよこすことが多いが、若い人は柔軟。実際に子どもの姿を見ると気づくはず。そして、その人が変えようよと言え、若い人が変えられる。若い人が言ってもダメ。実際の子どもの姿や、最近の研究から話して、その人を否定せず、子どもを想う思いだけは認めてあげる。ただ、最近の研究で変わってきていることは認識すべき。資格がある、ないではなく、子どもを相手にしている人なら、子どもにとって何がよいことを考える。最近の研究は、勉強しないと言えない。私が行って研修に行ってもいいと思うが、自分の園長から言われるとイラッとすることもあると思うが、別の園長から言ってもらおうとか、客観的に最近の研究はこうだということを学ぶべき。その人の経験からいいと思っていることを、しようと思っていることは認めないといけないと思います。

【保育士の対応】（活動の切り替え）

時間を決めてここまでいいよとか、ここまで来たらおいでとか、約束をすることです。基本的に子どもは区切りを知っている、うちは流しが3つしかありません。一齐に給食ですよ、という並んでしまう。子どもは待てる子がまず行きます。ずいぶん待っているでしょと言われるが、ちょうど3人ずつくらいなので、込まないでいい。待てない子は、最後まで遊んでくれている。ただ、これ以上遅くなったら食べちゃうとか、針がここまで来たら、おいでとか、特別感を出してあげる。切がついたらおいでとか、約束をするといいと思います。「見守る」を、シンガポールで訳されたら、watch & wait。子どもの姿を見て、待ちましようという意味だが、私はそうではなくて、watch & respond だと思っている。子どもをよく見て、子どもが言うことに反応する。自分からいつ行くかを決めさせる。時間だけど、どうする？とか、行く？やる？と決めてやる必要がある。これは「守る」ほうで、見るだけでなく、「守る」ことも大事で、子どもの意思を守ることです。ピーステーブルで、いつまでも解決しないときは先生が行きます。白黒の判決をするのではなく、「先生に何かできることはある？」と聞く。そうすると、向こう言っていてと言われるが、向こう言っていてと言われたら、意地でも自分たちで解決してくれる。ひと押しされることも大事です。うちの男性があるときお茶を持って行って、お茶でも飲んでと言っていた。解決するような環境を先生たちが作ることは大事。時計も3階の時計が12時のところに馬シールが貼ってあり、そこまで来たらおいで、とか、約束をしていく。命令で行きなさいではなく、約束することも悪くないと思います。

【保育士の対応】

鼻水が出ていることに拭いてあげることがあると思いますが、拭いてと来た時に、拭くようにしていますが先生はどう考えますか。

鼻がついていることに、本人が気持ちがいらないとやらないので、「鼻が出て気持ち悪いでしょう、さっぱりして気持ちいでしょう」と繰り返すことで、自分で気持ち悪くなる。黙って拭いてしまうのはよくないと思うので、言葉掛けをする。おむつでも気持ち悪い、気持ちいの区別がつかないこともあるので、「口の周りにいっぱいついて、気持ち悪かったでしょう、きれいになったね」と声を掛けたり、どちらが気持ちいいかを感じさせることも大事だと思います。

【保育士の対応】

やりたくない子はどうすればいいのでしょうか？

まず何をやらせたいか。鯉のぼりを作ろうという時に、作りたくないという子がいたとして、この子を鯉のぼり職人にしたかったらさせないといけない。それを通して、はさみや糊をうまくさせようというなら、鯉のぼりが嫌なら、別のことをすればいいと思います。その意図に必ずしもこだわらなくてもいいと思います。それからもう一つは、やるか・やらないかではなくて、どちらをやるかにするか。いつやるかとか、選択を用意する。鯉のぼりを作りましょうではなく、今日作りたい子、明日作りたい子と言って、そうすると先生も半分ずつ、指導すればいいので、今日、明日？と聞くといいと思います。選択をする時に、散歩と室内で、いつも室内ばかりでということで、外に行きたがらないというが、先生が選択肢は作れるので、近い公園と遠い公園としたら、外に行かせられます。まず、種類を選ばせるか、習熟度か、日にちか

で子どもに、自分で選ぶ部分をつくること。何をしたいかで、他のことにする。食べ物で、ビタミンCを摂らせようと思ったら、別の物でもいい。一つのものにこだわらない。私が小学校1年生を担当しているときに、絵画指導で、嫌だという子を放っておいて、やったほうが楽しい思いをさせたことがあります。例えば、手の絵を描かせたことがあったが、型を取って、嫌ということは放っておいて、その後にしわを書いて、その手で、じゃんけんをしたが、しなかった子は、羨ましそうにしていた。やったほうが面白いという経験をさせないとダメだと思います。いろいろな方法があると思うが、一つだけにこだわらないで、執着しないでいいと思っていれば、いいと思います。少しは選択する余地があるといい。どうしてもやらせたいときは、選ばせるでいいと思います。

【保育士の対応】

新園の立ち上げ等の際において、見守る保育の浸透していない子ども(3歳児以上)に対して、保育士がまず最初の段階で一番に取り組んでいくことはどんなことが挙げられるでしょうか？

私の園でも経験したが、前提に前の園がどんな保育をしていたか。こういうことがイギリスであった。体罰の国で、鞭で叩く。これはよくない、止めたほうがいいという運動が起きたが、子どもが大変になった。やっぱりある程度必要だろうとなった。これは真逆だと思った。一つは、ひどくなったのは、体罰は何の効果もなかったということ。やめても、ちゃんとしていたら意味があったかもしれないが、体罰には効果がなかったということ。体罰をされてやっていたことが、やめたことでもっとひどくなり、体罰をした子は嫌な思いをしていても体罰をしてしまう。悪の連鎖というのが伝承してしまう。前の園で無理やりに昼寝させていたら、昼寝をしても、しないでいいだと、子どもは選べない。本人の意思を保障していたらそんなことはないが、民営化を受けた園はよかった。いい先生は面倒見がいいので、全部やってもらっていた。

【異年齢児保育】

3.4.5歳児が遊び込めないのは0.1歳児の保育の問題だと言っていました、

今現在いる3.4.5歳児は過去には戻れないので、今からどのような保育をしていけば良いですか？

戻れないが、それぞれの経験や発達を少し戻らないといけないと思います。少しずつ自分で決めるようなことを増やしていくとか、最初から任せるのではなく、少しずつ子ども同士に繋ぎ合わせていくとか、3.4.5になると依存をしてくるので、抱っこと言ったらすぐにした方がいいが、小さいころから言わないのに、抱っこをしていると依存してくるので厄介。そういう時は、子どもに自信を持たせないといけない。共依存と言って、大人に依存してくる子たちは、先生も子どもに依存しまう。自分をいい保育士だと、正当化し始めると大変。お互いが依存し合う関係だと大変。その子のいいところを見つけて、そこに自信を持たせていく。何でも突き放すのではなくて、だんだんと移行していくことだと思います。先生に対してもそう。こういうことが自信になると認めてあげる事。ここだけでは人と違って、できるものがあると依存をしなくなってくる。3.4.5も好きな場所、好きなところを見つけてあげることだと思います。先生はモデルにならないとだめ。先生という権利で、指示・指導するのではなくて、年長がモデルになるところが育っていない場合は、先生がモデルをする。新しい遊びをするときは、先生が率先して楽しむこと。子どもが興味を持って、遊びはじめたら、次第に先生は抜けていく。育っていないと、最初は先生が入らないと無理。子どもは想像力があるというが、私は経験がないと無理だと思っている。この間、新しい助手と話していると、ちょうど3歳の担任なので「色々な経験をさせた方がいい。先生が率先して面白いがること。」と話した。例えば、これは私の子ども会の時の経験談だが、キャンプファイヤーをやった。点火する方法はいくつかあるが、子どもたちに話し合わせた。キャンプをしたことがないと思いつかない。その助手に「点火の仕方、思いつく？どうする？」と聞いたら、「ライターで点けます」と言ってびっくりした。そうではなくて

「ファイヤーマスターって知らないの？」と聞いたら、「知らない」と言っていた。そういう事で、新しいアイデアを生むのは、きちんとやった子が、それに対してアイデアを出してくるので、そういう経験をする。させるのではなく、するという事は先生が率先してする。私の園で色々な制作をしているが、秋には芸術の秋でもあるから、大きな段ボールなどを使った経験を子どもにさせた方がいいのではと言ったら、どうしたらいいかと聞かれた。先生が大きいものを作りはじめ、興味持ったら、まき込んでいったらいいのではと言った。いくら子どもに任せると言っても、作ったことがない子たちは無理なので、最初は先生が面白がることと言った。色々な経験させていくことが大切なので、遊び込めないのは、そういう経験が豊かでない可能性があるので、経験をさせていく。これが現在は学習指導要領で小学校1年生はアクティブラーニングといって、子どもに経験から色々学ばせようと変わってきている。机といすに座って学ぶのではなく、経験・体験から学ばせようと学校教育で始まっている。私たちは3.4.5の遊び込めない子たちには、まず色々な経験をして、それをベースに自分の発想を膨らましていく手伝いをする。遊びが停滞するときには当然助言しないといけません。先生が全く手を出さないことではない。率先して興味を持つとか、好奇心をもってモデルとして取り組むことで、引っ張られて、やり始めたときに、だんだん子どもに任せて、手を引いていくことが大事だと思います。ゼロから遊び込みなさいは無理だと思うので、そういう場合は先生がやる。それを突っ立って、ああやりなさいと言っはいけない。一緒に面白がることは悪いことではありませんので、少しずつ3.4.5にも経験させていくといいと思います。

【2日間のまとめ】

悩んでいることはなくならないと思います。障がい児をどう考えるかなど、色々な悩みが保育の中に日々あると思います。すっきりとした正解があるとは限りません。現在、OECDが提案しているのはプロセス評価と言って、プロセスが大事と言っている。見学の際に例えば、子どもたちが何かして褒める時に、結果を褒めるのではなく努力を誉める。結果を褒めると、子どもは結果だけを求めるようになってしまう。悩みも悩みが大事。考えることが大事。世田谷区が『世田谷の保育』と言って、質の高い保育の冊子を保護者に配っています。その中に書かれているのが、専門性の保育士のことを、子どもがけんかをした時に、「コラ！止めなさい！」というのが専門性のない保育士。この子たちをどこまで見守っていいのか、どこから介入するのかを考えるのが専門性があると書かれています。答えを見つけることではなく、考えることが専門性と書かれています。いい答えが出るのが専門性ではありませんし、喧嘩をどこで止めればいいのかという正解があるわけでもなく、それを理由なく、怒るのではなく、一体どこまで任せたらいいのだろうか、どこから助けるかを考えることが専門性があることですので、悩みが出て自分たちで考える事。ふとした瞬間に、子どもたちから見つかることがあります。そういう積み重ねが保育ですので、何でも答えを出すことが専門性ではありません。いいわけになるかもしれませんが、出した質問に答えることですっきりしたのではなく、悩みを紙に書くことではっきりする。それがもう一回、保育を見直すことになりますので、みんなで話したり、皆で考えてみてください。その過程が大事だと思います。一緒になって考えていければいいと思います。悩みが尽きないから保育は面白いと思います。解決していたら、終わっていますので、いつまでも悩みはあるし、やっと合意したと思ったら、また分からないの繰り返しになると思うが、Q&Aも必要なのは、いつまでも悩みが尽きないからあると思うので、悩みが付いたら私もいらなくなりますので、お互いに考えていくこと、子どもの言うとおりにすることではなくて、色々やることに意味があると思いますので、一緒に考えていけたらと思います。GTの仲間はいいい仲間だと思いますし、大豆生田先生が来た時にいろいろ園に行っ、質がいい保育はだいたいGTの園と言っ頂きましたが、保育について考えているメンバーが多いので、自信を持っていい保育を進

めてください。すべて悩みが解決したとは思わないが、やりながら、考えながらやっていきたいと思います。明日も見学がある方は一例ですので、園に持って帰って参考にしてみてください。昨日、今日とありがとうございました。

本稿は、2018年10月15日に行われた第49回保育環境セミナーの「Q&A」の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマオルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマオルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。